

有機農業の基盤が出来た安平町に 新規就農したふたつの農場の軌跡

「こころ自然農園」と「白樺オーガニックファーム」

11月号に引き続き、胆振管内安平町で新規就農の夢を実現したふたつの農場の営みを紹介する。2015年に入植した「こころ自然農園」は当初、2ヘクタールの耕作放棄地を重機などを使い自力で開墾。のちに離農跡地を取得して農地を増やし、平飼い養鶏と畑作を軸にした経営を続けてきた。地元や苫小牧市などに顧客があり、地元の「道の駅」やコープさっぽろの店舗などで平飼い卵を販売中だ。今年春に独立した「白樺オーガニックファーム」では、大豆の有機栽培に取り組むかわら、サツマイモの試験栽培や40種類ほどの有機野菜の生産も手がける。オーナーは元自衛官で2年間の研修期間を経て就農した。そんな両農場のこれまでの軌跡をたどる――。

(ルポライター・滝川 康治)



今年から新規就農して、有機大豆などの栽培に励む「白樺オーガニックファーム」の佐藤賢治さん、愛子さん夫妻(左)と、平飼い養鶏を続ける「こころ自然農園」の反町貴志さん、恵さん一家



安平町内の「道の駅」やコープさっぽろなどで販売されている「こころ自然農園」の平飼い卵

「食」に関心もち埼玉で研修
北海道内での就農をめざす

安平町が運営する安平山スキー場に隣接した地に広がる「こころ自然農園」。ここは2014年に反町貴志さん(78年、苫小牧市生まれ)と恵さん(81年、神奈川県生まれ)夫妻が始めた、平飼い養鶏と畑作の農場だ。現在は1500羽ほどの採卵鶏を飼い、小麦やソバなどを作る。農場には、小頭数のジャージー牛や羊、山羊、馬などもおり、まるで動物園のようだ。

苫小牧のサラリーマン家庭で育った反町(旧姓・田中)貴志さんは、少年時代から農業に対する関心があつたという。生き物とりわけ鳥が好きで、子どものころからセキセイインコを飼ったりもした。

防水加工の仕事に携わったのち、18歳で首都圏に働きに出て10年間ほどタクシー運転手続けた。将来の新規就農に向け、開業するための資金稼ぎだった。

やがて、資金が貯まったころに起きたのが11年3月の東日本大震災と福島第一原発の過酷事故。都会で暮らすことの危うさを強く感じ、埼玉

県小川町で有機野菜などを作る「風の丘ファーム」(田下降一代表取締役)で1年間の研修生活を送る。鶏も飼っていた同ファームは、以前から平飼い養鶏をめざしていた貴志さんにとって良き学びの場になったようだ。のちに妻となる反町恵さんとも、この農場で出会った。

神奈川県内の普通高校を卒業した恵さんは、藤沢市内にある日大生物資源科学部に進んだ。学生時代は、永続可能な農業を基盤に人と自然が共生しながら豊かになれるような暮らしをめざすバーマカルチャーや環境共生型の住宅づくりなどに関心があつたという。

2003年に大学を卒業し、関東地方のNPO法人などが運営する農業体験の団体や自然学校などで働いた。しかし、アトピー性皮膚炎を患う中で、身近な食べものに関心を向けるようになり、埼玉の「丘の上ファーム」で研修する道を選ぶ。そこで出会ったのが貴志さんだった。

「当時は実家が近くにあつたので、埼玉で農業をやろうとしたんですが、途中で話が変わってしまつて」と、恵さんが笑顔でふり返る。

中鈴子さんも住んでいた。

北海道に戻り、小路健男さんが安平町内で営む「無何有の郷農園」(本年9月号を参照)で12年から2年間の研修生活を送り、14年に晴れて現在地での新規就農が実現した。

しかし、実際に開墾を始めてみると難題が立ちはだかった。当初の所有農地は約2ヘクタールの耕作放棄地。パワーショベルなど使って生えている樹木を抜き取り、表土をめくる。火山灰が露出しているところに堆肥を入れて土づくりをする……。それから畑にしてジャガイモや大根などを作り、ハウスでは葉物野菜を栽培しました。それらの費用に2百万円も掛かったのが痛かったですね」と貴志さんが話す。

なんとか初期の開墾を終え、翌15年春に百羽の鶏を導入し、念願の平飼い養鶏がスタート。同年暮れには町内や苫小牧などの知人らに卵を販売できるようになった。

18年9月、台風が襲った翌日、胆振東部地震に見舞われた。そのことをきっかけに地続きの農地の所有者から購入を打診され、新たに5ヘクタールを買い取った。

現在は、合計8ヘクタールの農地



今年大豆の出来具合を確認する「白樺オーガニックファーム」の佐藤さん夫婦

結局、愛子さんの希望に応える形で、22年に職場を辞める意思を固めた。有機農業のウェブサイトを探索すると、安平町の取り組みが目についた。町に問い合わせ、同年秋には前出の小路健男さんが面接をしてくれることになった。

1年間の引き継ぎ期間を経て、23年3月に自衛隊を退職。すぐに移住して町内の新規就農者向け住宅に入

居し、2年間の研修生活が始まった。ほとんど拍子で話が進み、昨年にはたまたま空いた離農跡地に入ることができた。そして今年春、晴れて新規就農の夢が実現した。一昔前には就農までの期間が5年以上もかかる町もあったのと比べると、佐藤さんのケースは、きわめてスムーズに事が運んだ。

現在の経営面積は8・2ヘクタールで、自宅周辺にまとまってある。今年は全面積、納豆用などに向く小粒大豆『ゆきしずか』を有機栽培し、間作として秋まき小麦を3ヘクタールほど作付け。栽培方法は、先月号で紹介した中村欣さんとはほぼ同じだが、畑が砂地なので発酵鶏糞や堆肥などの有機資材は使う。

家庭菜園的に40種類ほどの野菜を栽培（有機JASは認証済み）し、地元『道の駅』に出荷するなど意欲的に取り組んでいる。

農地や機械類、倉庫などの購入で初期投資は3千5百万円ほど。北海道農業公社の事業に乗せ、補助金の約3千万円を償還していく計画だ。25年度から3年間は、国の経営開始型補助金として月額10数万円が交付されており、その間に経営の基礎固

めをしていくことになる。

筆者が2回目の取材に訪れた10月中旬、佐藤さん夫婦は収穫した大豆の選別準備などを進めていた。

「わたしの担当は野菜の管理が多いのですが、ちょっとだけコンバインに乗りましたよ。（夫とは）『少しずつ乗れる機械を増やさなければ…』と話しているところです。（夫妻が暮らす）安平地区の農家の皆さんをはじめ、他の地区の方も皆やさしくて、話しかけてきてくれる。ここに新規就農して良かった、と思いますね」（愛子さん）

賢治さんは、関係者の取り組みに對し、こう感謝の弁を述べる。

「先輩たちがきちんとやってくれているし、周囲の農家にもポジティブに受け止めてもらい、すごくありがたいですね。（有機農業の）基盤を創ってくれて、その上に自分たちがいる。それらがなければ有機での新規就農が広がることが出来なかった。

ただ、今後は（居抜きでの）第三者継承の新規就農者を支援するやり方を増やすといいのでは…。（継承する側の）基盤があるところからスタートするほうが有利だと思います」

「白樺オーガニックファーム」の圃場



佐藤さんは今年、自宅まわりの8ヘクタールほどの一枚畑で大豆を作った

は現在、有機栽培への転換期間中（3年間）で、来年は全面積の有機JAS認証を取得する予定だ。大豆と小麦に加え、サツマイモの作付け面積を増やし、野菜づくりも拡大していく、という。

安平町では、来年も新たに一軒が有機農業で新規就農する予定だ。10戸ほどの有機農家がまとまって就農しているところは、道内ではこだけ。「安平方式」での就農システムを創ろうとするまちが続いてほしい。



反町さんの農場ではジャージー種の乳牛も3頭飼育している

どを使わず、健康な鶏を育てることに努めています。（経営的には）野菜の生産だけだと不安定な面があるけれど、卵の販売で日銭が入ってくるし、鶏糞や堆肥によって有畜循環も図れる。そこで、鶏と畑作という形に行き着きました（貴志さん）

卵は現在、安平町の「道の駅」やコップさっぽろのご近所野菜コーナーなどで販売され、週に3回は町内や厚真町、苫小牧市方面の顧客に配達もしている。

「北海道に来て10年、ようやく気候にも慣れた感じですね。本州の暑さにはついていけなかったのが、良かったと思う。いろんなところを歩いたので、田舎に共通する人間関係の良さが自分には合っているし、安平は良いところだと感じています」と恵さん。今後は、規格外の卵を使ったシフォンケーキやプリン製の・販売も視野に入れている。

この地で鶏を飼い始めたころ、21年前に町内に新規就農した、先輩の上田聡明さんに誘われ、「全国自然卵養鶏会」の北海道グループに入会した。現在の道内会員は40人ほど。貴志さんが会長を務め、現地見学会や意見交換などを続けている。

「安平では、先輩たちの存在が有機農業を広げることに大きな役割を果たしています。うちは今後、これ以上は鶏を増やさず、妻とばあちゃんの3人で現状維持かな…。小麦やソバの品質を高めつつ、きちんと循環させていきたい」（貴志さん）

小3から中学1年まで女の子が3人。子どもたちの成長を楽しみにしながら、反町さん夫妻の歩みが続く。

自衛隊を辞め30代で就農を実現 先輩に恵まれ大豆などの栽培へ

安平町内に広がる畑作地帯の一角に今年、30代の若手農家が新規就農を果たした。「白樺オーガニックファーム」を営む佐藤賢治さん（88年、美幌町生まれ）、愛子さん（同、北見市生まれ）夫妻だ。大豆栽培を柱にすえつつ野菜づくりも手がける。

賢治さんは公務員の家で生まれ育った。母親の実家は美幌町の畑作農家で、少年時代に豆積みの仕事を手伝ったこともある。妻の愛子さんは高校の同級生という。

北見市内の高校を卒業した賢治さんは、航空自衛隊に入隊。地上無線整備の業務を担当し、網走市と埼玉県熊谷市で8年ずつ勤務した。



「こころ自然農園」では羊や山羊、道産馬なども飼育。子どもたちとも仲良くなっている

愛子さんは埼玉時代、長ネギの特産地として知られる深谷市の福祉事業所で働き、農業体験の機会があった。一次産業に対する関心を深め、「自分も、食べものに関わる仕事をしたい」と思うようになったという。

賢治さんはいずれ公務員生活にピリオドを打ち、何らかの形で独立できないかと考えていた。岩見沢市内で新規就農した知人から話を聞き、農業に対する関心を深めていく。